

高等学校における教科指導の充実

国 語 科

新学習指導要領への対応

— 言語活動の充実（2） —

栃木県総合教育センター

平成23年3月

# ま え が き

21世紀は、新しい知識・情報・技術が、政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われていています。そのような時代を生きるために、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になります。また、各種の調査からは、日本の児童生徒について、思考力・判断力・表現力、知識・技能の活用、学習意欲、学習習慣・生活習慣などで課題があると分析されました。このような状況を踏まえて、平成20年1月の中央教育審議会答申で学習指導要領の改訂の方向性が示され、平成21年3月に高等学校学習指導要領が告示されました。

平成22年12月に公表されたOECD生徒の学習到達度調査（PISA2009年）の結果においては、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーのそれぞれで下位層が減少し、上位層が増加したことから、読解力を中心に日本の生徒の学力は改善傾向にあると考えられていますが、課題は依然として残されています。今後とも引き続き、基礎的・基本的な知識・技能の習得や、問題解決のための思考力・判断力・表現力の育成に努めていくことが求められます。

栃木県総合教育センターでは、基礎・基本の確実な定着を図る教科指導の在り方について研究するとともに、その成果を普及することで生徒の学力の向上に資することを目的に、平成17年度から「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」を行ってきました。今年度は、昨年度に引き続き、「今回の学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、各種調査の結果から指摘されている課題の解決を図るための教科指導の在り方を探る」ことに重点を置き、国語科、地理歴史科、数学科、理科、外国語科（英語）の各教科で調査研究に取り組みました。本冊子はその成果をまとめたものであり、教科指導を充実させる一助として、御活用いただければ幸いです。

最後に、調査研究を進めるにあたり、御協力いただきました研究協力委員の方々に深く感謝申し上げます。

平成23年3月

栃木県総合教育センター所長

瓦 井 千 尋

# 目 次

1 調査研究の背景	1
2 国語科における指導の工夫 ―言語活動を取り入れた指導―	2
事例1 和歌から想起される物語を書く	3
事例2 短歌を読んで、自分なりに考えたことをリアクションカードに書く	9
事例3 「水の東西」をもとに「私の比較文化論」を書く	17
3 言語活動を充実させるために	
(1)指導の改善の方向 ―言語活動を取り入れるという視点から―	27
(2)言語活動を取り入れる上での留意点	
ア 言語活動例についての考え方	29
イ 言語活動を取り入れた授業を構想する過程	29
ウ 言語活動を取り入れる際の指導の過程・指導のポイント	30
(3)各教科・科目等における言語活動の充実に資するという視点から	33
<b>【参考資料】</b>	
・新学習指導要領における国語科改訂の要点	36
・高等学校国語科の学習指導要領に示された言語活動例の新旧対照表	39

※本資料は、栃木県総合教育センターのホームページ「とちぎ学びの杜」内、「調査研究」と「教材研究のひろば」のコーナーにも掲載しています。

(「とちぎ学びの杜」 <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>)

## 1 調査研究の背景

平成21年3月に告示された学習指導要領の改訂においては、「OECD生徒の学習到達度調査（PISA調査）」など各種の調査から明らかにされた、次のような課題が反映されている。

- ①思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題において、無答率が高いという課題が見られる。
- ②読解力に関しては成績分布の分散が拡大し、成績中位層が減り、低位層が増加している。
- ③家庭での学習時間の減少など、学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題が見られる。
- ④自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下といった課題が見られる。

特に、教科の指導においては、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させること、知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成することが重視されている。その実現のためには、「習得・活用・探究」のバランスを取った学習活動の展開が重要であり、高等学校学習指導要領解説の総則では、次のように述べられている。

<高等学校学習指導要領解説総則 第1章 総説 第2節 改訂の基本方針（抜粋）>

- ②知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること。

確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむことの双方が重要であり、これらのバランスを重視する必要がある。

このため、各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視するとともに、観察・実験やレポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を充実すること、さらに総合的な学習の時間を中心として行われる、教科等の枠を超えた横断的・総合的な課題について各教科等で習得した知識・技能を相互に関連付けながら解決するといった探究活動の質的な充実を図ることなどにより思考力・判断力・表現力等を育成することとしている。

また、これらの学習を通じて、その基盤となるのは言語に関する能力であり、国語科のみならず、各教科等においてその育成を重視している。さらに、学習意欲を向上させ、主体的に学習に取り組む態度を養うとともに、家庭との連携を図りながら、学習習慣を確立することを重視している。

これらのことを踏まえつつ、各種調査の結果から指摘されている課題の解決を図るための教科指導の在り方を探る調査研究に取り組んだ。

---

※本冊子においては、平成11年3月に告示された学習指導要領を「現行の学習指導要領」、平成21年3月に告示された学習指導要領を「新学習指導要領」として記す。

## 2 国語科における指導の工夫 —言語活動を取り入れた指導—

新学習指導要領においては、教育内容の主な改善事項として「言語活動の充実」が示され、「国語をはじめ各教科等で批評、論述、討論などの学習を充実」することが求められている。言語活動を通じて指導事項を指導するという自体は現行の学習指導要領においても行われてきたことであるが、国語科においては今後、教科内における言語活動をさらに充実させるのみならず、各教科・科目等の学習における言語活動の充実に資するという視点を併せもつことが求められる。

そこで、「高等学校における教科指導の充実」（国語）においては、昨年度から「新学習指導要領への対応 —言語活動の充実—」をテーマとして、授業を改善する方向を探ってきた。今年度の研究においても、「研究協力委員が勤務校で担当する各科目において、新学習指導要領の指導事項や言語活動例を踏まえて実践する」、「言語活動を取り入れた指導を考える」という点は、昨年度と同じである。今年度の研究の特色としては、「短時間でできる言語活動」という観点から考えたことがある。また、言語活動を充実させるための考察を第3章にまとめた。

なお、参考として「新学習指導要領における国語科改訂の要点」と「高等学校国語科の学習指導要領に示された言語活動例の新旧対照表」を、巻末に掲載した。

### 事例1 和歌から想起される物語を書く

訓詁注釈に偏りがちな古典の指導を改善することを目指し、生徒が、学習内容への理解を深めながら、古典を学ぶおもしろさを感じることができるよう、言語活動を工夫した。

### 事例2 短歌を読んで、自分なりに考えたことをリアクションカードに書く

生徒が受け身になりやすい韻文の指導を改善することを目指し、言語活動を通して生徒が自分なりに考える学習場面を設定した。

### 事例3 「水の東西」をもとに「私の比較文化論」を書く

生徒による作業時間の差が大きくなるために、指導時間がのびてしまいがちになる「書くこと」の指導をできるだけスムーズに展開することを目指し、グループ学習を取り入れた。

#### <研究協力委員>

栃木県立宇都宮中央女子高等学校	教 諭	稲葉 尚幸
栃木県立小山城南高等学校	教 諭	川上 浩子
栃木県立宇都宮清陵高等学校	教 諭	佐山 功

#### <研究委員>

栃木県総合教育センター	研究調査部	指導主事	古口 のり子
-------------	-------	------	--------

## 事例 1

## 和歌から想起される物語を書く

### 1 育成を目指す言語能力

日本の伝統的な文化の一つである和歌及び歌物語についての理解を深めながら、そこに描かれた人物、情景をより深くとらえるための言語能力を育成する。新学習指導要領の「国語総合」の指導事項「C 読むこと」の「ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。」を指導の中心に取り上げ、「和歌及び歌物語の特質や表現等に留意しながら、内容を的確に捉え、情緒を豊かに膨らませている。」という評価規準を中心にして評価する。また、言語活動例の「ア 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること。」を参考にして設定した、「和歌から想起される物語を書く」という言語活動を通して、前述した能力を育成する。

この実践では、訓詁注釈に偏りがちな古典の指導を改善することを目指し、生徒が、学習内容への理解を深めながら、古典を学ぶおもしろさを感じることができるよう、言語活動を工夫した。具体的には、『伊勢物語』「芥川」の導入として、和歌から想起される物語を書くという言語活動を取り入れることにより、古典作品への興味・関心を高めさせるとともに、学習内容や作品に対する理解を深めさせながら、歌物語における和歌と本文との相互の関係に気づかせることを目指した。

### 2 学習活動の概要

(1) 単元名 物語 『伊勢物語』－「芥川」－

(2) 単元の目標

- ①和歌や歌物語を読んで、現代との相違点や共通点について、自分の考えを広げたり深めたりしようとする。 (関心・意欲・態度)
- ②本文の内容を的確に把握する。 (読む能力)
- ③和歌及び歌物語に描かれた人物、情景、心情を表現に即して読みとり、それらに対するの自分の考えを、話し合いを通して広げたり深めたりする。 (読む能力)
- ④歌物語について理解する。 (知識・理解)
- ⑤助詞の用法や助動詞の意味などの文法事項について理解する。 (知識・理解)

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
①和歌や歌物語を読んで、現代との相違点や共通点について、自分の考えを広げたり深めたりしようとしている。	①本文の内容を的確に把握している。 ②和歌及び歌物語に描かれた人物、情景、心情を表現に即して読みとり、それらに対するの自分の考えを、話し合いを通して広げたり深めたりしている。	①歌物語について理解している。 ②助詞の用法や助動詞の意味などの文法事項について理解している。

(4) 指導と評価の計画 (4 時間)

※太線で囲まれた箇所、表題にある言語活動を行った。

※助動詞については一通り学習済みである。

時間	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1	和歌から想起される物語を書く (1) 『伊勢物語』の成立、内容や歌物語についての概要を確認する。	○できるだけ簡潔に行う。	
	(2) 6人程度のグループになり、ワークシート(資料1)を使って、以下のⅠ～Ⅲを行う(20分)。 Ⅰ 「芥川」作中の和歌「白玉か～」の解釈を行う。 Ⅱ 和歌から読み取ったことを手掛かりにして、詠み込まれている人物や状況等について推測する。 Ⅲ 物語全体のイメージについて話し合い、歌から想起される物語を書く。	○机間指導を行いながら適宜助言を行うが、助言の内容は生徒自らが考えるためのヒント程度にとどめる。  ○和歌から読み取ったこと(語句や文法事項等の知識)を基にして物語を考えさせる。	読む能力② 知識・理解② (ワークシート)への記述の確認及び発表)
	(3) グループごとに、想起される物語を発表する。	○発表時間は、1グループあたり3分程度とする。	
2 4	「芥川」本文を読解する (1) 本文を音読した後、主語を確認しながら現代語訳し、男の行動を順を追って整理する。 (2) 女を失った男の落胆ぶりを、歌に即して読み取る。  (3) 「白玉か」の歌までの部分(前半)とその後の記述(後半)のつながり、描かれ方の違いについて考える。 「芥川」と比較する (1) 「芥川」と自分達が想起した物語とを比較し、相違点や共通点、気づいたこと等について話し合い、発表する。 (2) 歌物語という形式の特質を理解する。	○展開を丁寧に追わせる。  ○男の行動と心情を読み取らせ、歌に恋の顛末が集約されている点に留意させる。  ○「男」、「女」で展開する世界と具体的な人物名で展開する世界との、表現の質の違いに留意させる。  ○物語を想起した際のグループで話し合わせる。  ○物語が和歌に集約していく点を確認させる。	読む能力① 知識・理解② (観察・発言)    関心・意欲・態度① 知識・理解① (観察・発言)

### 3 評価の例

第1時での和歌の解釈の際は、取り立て指導で直前に助動詞を学習していたことや、グループ学習での学び合いにより、和歌の品詞分解について適宜ヒントを与える程度で、生徒は適切な解釈に至ることができた。人物や状況についての推測及び想起される物語の話し合いは、ワークシートの□「この歌が詠まれた状況を推理してみよう」の項目を踏まえて行った。このため生徒は、「高貴な女性を好きになった男が、その女性と二度と会えなくなったことを悲しんでいる」といった大筋を基にして、物語を膨らませていった。特に、「なぜ二人が「二度と会えない」状況になったのか」という点に関しては、生徒の興味が集中し、非常に活発なやりとりが行われていた。生徒が考えた「二度と会えなくなった」理由は、「女が家に連れ戻されたため」というものと、「女が命を落としたため」というものにと大別された。「会えなくなった理由」を考えるあまりに、根拠の乏しい妄想的な方向に流れそうなグループに対しては、この一点だけにこだわるのではなく、あくまでも和歌から読み取ったことを基にして物語を膨らませるようにと指導した。生徒が想起した物語の内容は、概ね「芥川」に近いものであった（ワークシート記入例（資料1）参照）。第2～4時での「芥川」本文の学習においては、自分達が想起した物語はどの程度「正解」だったのかという点から、生徒が興味をもって臨んでいる様子を見ることができた。

「芥川」本文を学習した後に行った、第4時後半「芥川と自分達が想起した物語との比較」において、各グループから発表された主な内容は、次のようなものである。

- ・まさか「鬼」が出てくるとは思わなかった。現代は「鬼」の存在など全く思うことはないの、やはり時代が違うと感じた。
- ・和歌だけでは具体的なことがわからなかったの、女を「盗み出す」ことまではとても想像できなかったが、「男」の気持ち（女と会えなくなって悲しんでいる）は合っていたのでよかった。
- ・「芥川」の大筋がほぼ想像したとおりの内容だったので、逆に驚いた。和歌の中の助動詞「な」、「まし」の解釈が大きなポイントだったと思う。
- ・「男」が和歌、特に「消えなましましを」に込めた思いは、現代でも変わらない、普遍的な思いであると思う。だから、自分達が想起した物語も、その点はオリジナルと同じになったのだと思う。

（下線は稿者が付した。）

生徒からは波線（～・～）のように、現代との相違点や共通点に関する気づきが多く出された。特に、二重波線（〰）で示した気づきからは、生徒が古典の作品世界を現代につながるものとして実感できたことがわかる。また、破線（- - -）からは、生徒が、授業で学んだ文法の知識を古文を読むことに生かせるものとして実感できたことがわかる。

上述のような生徒の気づきから、歌物語について、以下のようなまとめに導くことができた。

- ・物語の細かいところは、やはり原文を読まないとわからない点が多い。
- ・具体的なことはわからなくても、和歌からは、人物の深い心情を読み取ることができる。和歌は、心情の表現に優れた力を発揮している。
- ・状況等を描写する本文と、心情を表現する和歌の双方がそろって、歌物語という形式の作品が成り立っている。

生徒は学習活動を通して、歌物語における和歌と本文の関係について実感を伴って理解するとともに、古典を原文で読む意義についても認識を新たにすることができた。

以上の実践はワークシートを用いて行ったものである。ワークシートを用いることには、授業をス



ムーズに展開できる良さがある反面、場合によっては、生徒の思考の幅を狭めてしまう危うさもある。そこで参考までに、今回の発展的な試みとして、ワークシートを用いずに物語を想起させた例を資料2に示す。推測するポイントも各グループの話し合いで決めることとしたため、想起した物語の内容には、ややばらつきは出てくるが、その分、生徒は広く伸び伸びと思考することができたようである。

#### 4 成果と課題

##### (1) 成果

本事例の成果として、次のようなことが挙げられる。

###### ア 本文（芥川）学習に対する関心・意欲の向上

本文を学習する際、生徒は、「鬼だったんだ」とか「(想像が)当たった」などの感想を発しながら、本文の展開を追っていた。このような生徒の様子は、普段の授業における様子とは明らかに異なるものだった。また、授業後には、質問や「芥川」の感想を伝えに来る生徒も目立った。このような生徒の様子から、和歌から想起される物語を書くという言語活動を通して、本文（芥川）学習に対する関心・意欲を高めることができたと思われる。

###### イ より正確に読もうとする意識の高まり

和歌を基にして物語を想起するためには、手掛かりとなる語句を正確に捉えながら推測していくことが必要になる。今回の場合は、直前に学習した助動詞の知識を基にして物語を想起させた。前項「3 評価の例」で挙げた生徒の発言からも、生徒は学習活動を通して、助動詞の意味を正確に反映させて作品を読むことの重要性を実感できたことがわかる。

###### ウ 伝統的な文化を理解するための契機になったこと

自分たちが想起した物語と「芥川」とを比較することにより、生徒は現代との相違点や共通点を明確に意識することができた。このようなことを実感させたことは、生徒が、作品が書かれた時代背景や日本の伝統的な文化について、興味をもち、理解を深めていくための契機になったと考える。和歌から想起される物語を書くという言語活動を通して、古典を現代に通じるものとしてとらえさせることができた。

##### (2) 課題

課題としては、次のようなことが挙げられる。

###### ア 言語活動を行う目的を明確に示すこと

何かを生徒に想起させるといった言語活動を授業に取り入れる場合においては、ともすれば生徒の動きの実際は教師の意図を大きく外れ、結果として「学習の目的を見失った活動」に陥ってしまいかねない。それを回避するためには、指導者がその言語活動を行う目的を明確に意識し、それをしっかりと生徒に伝えることが必要である。

###### イ 適切なヒントの出し方の工夫

生徒にどの程度のヒントを提示したらよいかについては、あらかじめ十分な検討が必要である。ヒントが少なすぎると展開が滞って時間を要するし、ヒントが多過ぎると生徒の考える余地を奪ってしまうことになる。いずれの場合も生徒の意欲を削ぐつまらないものになってしまう。生徒の実態や授業の展開に確保できる時間との兼ね合いなども考慮に入れて、ヒントの出し方を工夫する必要がある。

#### 使用教科書

・『高等学校国語総合改訂版』三省堂



④  
白王しらぎ か何ぞと人ひと 語りかしことき  
夜露よつゆと答へて消えくなすしものて  
夜露よつゆの希望きぼう

(訳)  
昨夜「あつちるのは白王が、か、何ぞと  
あつちる人か語りた時  
「あれは露です」と答えて  
「私もその露のうちに消えてしまて、りた  
(「私は悲しいことしたこと(か)か、たのに……」)

(物語)  
彼女と自分は身分が違はずき。  
でもその身分の縁にしぼられるのは嫌だった。  
そうして彼女を屋敷から連れだして、  
ハハハで遊んでやれた。  
空気が草の夜露を照らして輝いている。  
あつちるしてはたか、たか、どうとう彼女の家に  
捕らわれて、彼女は連れ戻されてしまう。  
その翌日、彼女の屋敷へ行くと、家来の一人に  
彼女が今朝さく、たど一と言われた。  
彼女は病かあ、たのた。  
もう彼女はいぬ。  
時間とともに実感して行く。  
あの夜、自分もその夜露のうちに消えてしまふ時、  
彼女とともに消えることができたのに。

## 事例 2

## 短歌を読んで、自分なりに考えたことをリアクションカードに書く

### 1 育成を目指す言語能力

表現に着目しながら文章を読み味わうという言語能力を育成する。新学習指導要領の「国語総合」の指導事項「C 読むこと」の「ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。」を指導の中心に取り上げ、「課題に応じて短歌を読み、自分なりに考えをまとめている。」という評価規準を中心に評価する。また言語活動例の「エ 様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。」を参考にして設定した、「短歌を読み、内容や表現の仕方などに関して考えたことを書く」という言語活動を通して、前述した能力を育成する。

短歌の指導においては、短歌を好む生徒とそうでない生徒とで、学習活動に対する取組の差が大きい。当然ながら、短歌を好まない生徒の学習活動への取組は消極的になる。この実践では、生徒が受け身になりやすい韻文の指導を改善し、言語活動を通して生徒が自分なりに考える学習場面を設定した。具体的には、リアクションカードを書くことを通して、自分なりに短歌を読み取らせることを目指した。

### 2 学習活動の概要

#### (1) 単元名 「短歌と俳句」

#### (2) 単元の目標

- ① 様々な短歌を読んで、作者やそれぞれの歌に込められた思いについて、自分なりの考えを広げたり深めたりしようとする。 (関心・意欲・態度)
- ② 短歌に詠まれた情景や心情などを読み味わう。 (読む能力)
- ③ 短歌の表現形式や表現技法を理解する。 (知識・理解)
- ④ 作者や作歌背景について理解する。 (知識・理解)

#### (3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
① 様々な短歌を読んで、作者やそれぞれの歌に込められた思いについて、自分なりの考えを広げたり深めたりしようとしている。	① 短歌に詠まれた思いや内容を読み取っている。 ② 表現を基にして、想像力をもって作品や作者をとらえている。	① 短歌の表現形式や表現技法を理解している。 ② 作者や作歌背景について理解している。

(4) 指導と評価の計画 (7時間)

※太字で囲まれた箇所、表題にある言語活動を行った。

時間	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1	与謝野晶子とその作品について学ぶ (1) 一首目 (その子二十揃にながめる黒髪のおごりの春のうつくしきかな) の内容を学ぶ。	○便覧を参考にさせる。 ○歌の内容を把握する上で必要と思われる語句や表現等について説明する。	読む能力① 知識・理解①② (観察・発言)
2	(2) 二首目 (やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君) と三首目 (鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな) の内容を学ぶ。	○歌の内容を把握する上で必要と思われる語句や表現等について説明する。	読む能力① 知識・理解①② (観察・発言)
	【リアクションカードを書く① (授業のまとめ)】 (3) 与謝野晶子の三首の中から好きな歌を取り上げ、自分なりに感じた歌の魅力を書く (10分)。	○堅苦しく考えず、自分が感じたことを書かせる。	関心・意欲・態度① 読む能力② (リアクションカードへの記述の確認)
3	(4) 「リアクションカードのまとめプリント」(資料1)を用いて、与謝野晶子の歌について復習する。	○クラスメイトの考えを参考に、もう一度与謝野晶子の三首を振り返らせる。	関心・意欲・態度① (観察・発言)
	若山牧水とその作品について学ぶ (1) 一首目 (白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ) の内容を学ぶ。	○便覧を参考にさせる。 ○歌の内容を把握する上で必要と思われる語句や表現等について説明する。	読む能力① 知識・理解①② (観察・発言)
4	(2) 二首目 (幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく) と三首目 (海鳥の風にさからふ一ならび一羽くづれてみなくづれたり) の内容を学ぶ。	○歌の内容を把握する上で必要と思われる語句や表現等について説明する。	読む能力① 知識・理解①② (観察・発言)
	石川啄木とその作品について学ぶ 【リアクションカードを書く② (授業への動機付け)】 (1) 石川啄木の三首を読み、自分なりにイメージした啄木像を書く (10分)。	○堅苦しく考えず、自分が感じたことを書かせる。	関心・意欲・態度① 読む能力② (リアクションカードへの記述の確認)
5	(2) 「リアクションカードのまとめプリント」(資料2)を参考にしながら、石川啄木について学ぶ。	○クラスメイトによる石川啄木のイメージと便覧を参考にさせる。	関心・意欲・態度① 知識・理解② (観察・発言)
	(3) 一首目 (たはむれに母を背負ひて/そのあまり軽きに泣きて/三步歩まず) と二首目 (友がみなわれよりえらく見ゆる日よ/花を買ひ来て/妻としたしむ) の内容を学ぶ。	○歌の内容を把握する上で必要と思われる語句や表現等について説明する。	読む能力① 知識・理解①② (観察・発言)
6	(4) 三首目 (みぞれ降る/石狩の野の汽車に読みし/ツルゲエネフの物語かな) の内容を学ぶ。	○歌の内容を把握する上で必要と思われる語句や表現等について説明する。	読む能力① 知識・理解①② (観察・発言)
	北原白秋、斎藤茂吉、島木赤彦とその作品について学ぶ 【リアクションカードを書く③ (発展)】 (1) 北原白秋、斎藤茂吉、島木赤彦の作品の中から一首選び、その歌の魅力を書く (10分)。	○自分なりの受け止め方でかまわないので、表現を基にして想像力を働かせて書くように指示する。	関心・意欲・態度① 読む能力② 知識・理解① (リアクションカードへの記述の確認)
7	(2) 「リアクションカードのまとめプリント」(資料3)を用いて、三人の歌人の中で一番記述が集まった歌を、一首ずつ学ぶ。	○歌の内容を把握する上で必要と思われる語句や表現等について説明する。 ○便覧で歌人についても学ぶ。	関心・意欲・態度① 読む能力① 知識・理解①② (観察・発言)

### 3 リアクションカードについて

「リアクションカード」（「リアクションペーパー」「ミニツツペーパー」）とは、授業者が自分の授業に対する学習者の反応を見るために用いる用紙である。今回用いたものは、縦約5.5cm×横約8cmでB4の用紙で16枚作れる大きさのものとし、体裁は右のようにした。「リアクションカードのまとめプリント」は、生徒が記述した9枚のカードをA4サイズ用の紙にそのまま貼り、タイトルを手書きするのを基本的なスタイルとした。

今回、リアクションカードを書くという言語活動を行ったねらいは、書くことを通して自分なりに短歌を読ませることにある。カードを書かせるタイミングは、授業の展開に応じて「授業のまとめ」、「授業への動機付け」、「発展」といった場面にした。

前項「(4) 指導と評価の計画」の中の「リアクションカードを書く①」は、リアクションカードを「授業のまとめ」に使用した例である。今回は、「学んだ歌の中で好きな歌を取り上げ、その歌の魅力を書く」といった課題で書かせた。その他には、例えば、「それぞれの短歌で作者が言いたいことは何か」といった課題でも、同様に「授業のまとめ」としてのねらいを果たせるであろう。

前項「(4) 指導と評価の計画」の中の「リアクションカードを書く②」は、リアクションカードを「授業への動機付け」に使用した例である。今回は、「石川啄木の三首を読み、自分なりにイメージした啄木像を書く」という課題で書かせた。その他には、例えば、「この歌人の歌にはどんな特徴があるか」といった課題でも、同様に「授業への動機付け」としてのねらいを果たせるであろう。

前項「(4) 指導と評価の計画」の中の「リアクションカードを書く③」は、リアクションカードを「発展」として使用した例である。今回は「三人の歌人の中から、(まだ学習していない) 一首を選び、その魅力を書く」という課題で書かせた。その他には、例えば、まだ学習していない歌の中から、同じ題材を扱った歌や同じ季節を扱った歌を、「歌合わせ」のように比較させることでも、同様に「発展」としてのねらいを果たせるであろう。

### 4 評価の例

「リアクションカードを書く①」で生徒が記述してきた主な内容は次ページのようなものである。特に、「その子二十〜」や「やは肌の〜」の歌に対しては、生徒が自らの体験にひきつけて歌を理解したような記述が目立った。また、波線(〜)のように、歌人像に言及した記述もあった。

「リアクションカードを書く①」は「授業のまとめ」として書かせたものであったため、授業で学習したことを基にして自分なりに思い描いた歌の魅力を書けているかという観点から、カードの内容を確認した。この観点から見たときに十分であると評価したカードのうちの9枚を「まとめプリント」(資料1)に掲載し、第3時の授業で配布した。第3時の授業の冒頭では、このプリントを見ながら、掲載されたカードの内容に対して生徒にコメントをさせたり、教師がコメントを加えたりしながら、与謝野晶子の歌をもう一度振り返らせた。

#### 【リアクションカード 表面】


#### 【リアクションカード 裏面】

1年 組 番
-----
(氏 名)
-----

【「リアクションカードを書く①」での、生徒の主な記述内容】

○その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな

・若い女の子特有の弾力のある豊かな黒髪から、強い生命力と美しい青春を描いた短歌は、私たちの世代にとても合っているように感じられる。

・「櫛にながるる黒髪」という部分だけで、若くて美しいことが伝わってきた。また、今をとても楽しんでいる感じがした。

○やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

・電車とかに乗っていると、女の人に興味なさそうな人をよく見かけるので、きっとこの歌もそんな人のことをいってるんだと思います。自分なりのイメージをつかみやすい歌だと思いました。そこが魅力です。

○鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな

・大仏のことを美男と言っていることがすごいと思いました。たぶん、大仏を見てほれほれすることはほとんどないと思うので、歌人はとても個性あふれる人なんだなと私は思いました。

・この歌の最後の夏木立と調和しているというところに共感しました。たしかに記憶にある鎌倉の大仏は風景と調和していて美しいと思います。

「リアクションカードを書く②」で生徒が記述してきた主な内容は以下のようなものである。啄木の三首の内容がどれも把握しやすいものであったせいか、生徒がイメージした啄木像はおおむね妥当なものであった。中には波線（～）のように、自分が抱いた啄木像が、歌中のどの表現に着目した結果であるのかを明確にした記述もあった。

「リアクションカードを書く②」は「授業への動機付け」として書かせたものであったため、歌から浮かんでくる歌人像を自分なりにとらえられているかという観点から、カードの内容を確認した。この観点から見たときに十分であると評価したカードや、言葉づかいには若干難があるものの、内容自体はおおむね妥当と評価したカードのうちの9枚を「まとめプリント」(資料2)に掲載し、第5時の授業で配布した。第5時の授業ではこのプリントや便覧を基にして、これらのカードに記述された歌人像が、歌のどの部分から生じたのか、また、記述された内容の適否はどうかなどを考えさせながら、石川啄木とその歌三首について授業をすすめた。

【「リアクションカードを書く②」での、生徒の主な記述内容】

・何かをして、そのときに思った感情を率直に短歌に表わしている人だと思った。

・落ち着いたある静かな人だと思った。

・少し貧しい暮らしをしている人だと思った。

・病気などで食べるものもなく、すっかりやせ細ってしまった母を背負い、あまりの軽さに泣いてしまい、歩けなくなるところから、歌人はとても心優しく、母思いの人なんだなと思う。

・さびしさと悲しさを背負った孤独な人。(母を背負って泣いているところから)

「リアクションカードを書く③」で生徒が選んできた一首は、北原白秋では「照月の～」、斎藤茂吉では「沈黙の～」、島木赤彦では「みづうみの～」が多かった。これらの歌に対して生徒が記述してきた主な内容は次ページのようなものである。特に波線（～）からは、生徒が表現に着目しながら自分なりに歌を読もうとした様子がうかがえる。

「リアクションカードを書く③」は、授業の「発展」として書かせたものであったため、自分が選んだ歌を、表現を基にして自分の力で読めているかという観点から、カードの内容を確認した。この観点から見たときに十分であると評価したカードや、歌に対する解釈の幅を広げるようなカー

下のうちの9枚を「まとめプリント」(資料3)に掲載し、第7時の授業で配布した。第7時の授業ではこのプリントや便覧を基にして、これらのカードに記述された内容が、歌のどの部分から生じたのか、また、記述された内容の適否はどうであるかなどを考えさせながら、「照る月の～」、「沈黙の～」、「みづうみの～」の歌をとりあげ、授業をすすめた。

【リアクションカードを書く③】での、生徒の主な記述内容

○照る月の冷さだかなるあかり戸に眼は凝らしつつ盲ひてゆくなり

- ・「照る月は夜、「冷」は冬と悲しさを表しており、だんだん見えなくなる眼に自分の寂しさを表現していると思う。
- ・寒さは定かだけれども自分の眼は確実に見えなくなっている。その証拠に、照る月のあかりは眼を凝らさなければ見えない、という作者の様子が伝わってきました。作者は眼が見えなくなるという恐怖と闘っていたのかなと思います。
- ・作者がだんだん目が見えなくなっていく様子が伝わってきた。明かりを見ても目が見えなくて、さみしそうな様子を思い浮かべた。

○沈黙のわれに見よとぞ百房の黒き葡萄に雨ふりそそぐ

- ・歌人は今さびしいのだという気持ちが伝わってきました。黒い葡萄に雨が降ってさらに重く暗く見せているように感じました。

○みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

- ・この歌の魅力は三月くらいの湖の様子を表現しているところだと思う。また、きれいな表現のしかただなと思った。「三日月の影波にうつろふ」というところの表現が特徴的だと思った。

今回の授業で回収したリアクションカードを見ると、ほぼすべてのカードに、自分なりに感じた歌の魅力や歌人像、また、歌に対しての解釈などが記されていた。自分の記述したものが、教師の目だけでなく、友人の目にも触れるかもしれないと意識するようになったことで、短歌を自分なりに読んでみようという意識が強く働いたようであった。

「まとめプリント」を配ると、生徒たちは、自分の書いたカードが取り上げられているかどうかを探すとともに、掲載されている他の生徒のカードに熱心に目を通していった。そして、一通り目を通し終わると、掲載されている他の生徒のカードについて感想を交わす姿が、教室のあちこちで見られた。このような生徒の様子は、同じ手法で授業を行ったどの教室においても見る事ができた。

## 5 成果と課題

### (1) 成果

本事例における成果として、次のようなことが挙げられる。

#### ア 自分なりに短歌を読み取ろうとする姿勢の高まり

以前の短歌の指導で、ノートに歌の感想を書かせたことがあった。歌に関心のある生徒は別として、そうでない生徒は、「よく意味がわからなかった」、「いい歌だと思う」などといった「一言」を書くだけであったり、促しても結局書けずじまいであったりした。しかし、今回の授業で生徒が書いたリアクションカードを見ると、ほぼすべてのカードに、自分なりに感じた歌の魅力や歌人像、また、歌に対しての解釈がしっかりと記されていた。このような生徒の様子を比べると、クラスメイトの目に触れることを前提としてリアクションカードを書かせることを通して、自分なりに短歌を読もうとする生徒の姿勢を高めることができたのではないかと思われる。



## イ まとめプリントを読むことが、作品に対しての生徒各自の考えを、広げたり深めたりするための契機となったこと

「リアクションカードのまとめプリント」には、クラスメイトによる様々な見方が示されている。他者の見方を踏まえながら自分で再び作品に向き合うことは、作品に対する自分の考えを広げたり深めたりすることにつながる。今回の指導では、まとめプリントを読むことが、作品に対しての生徒各自の考えを、広げたり深めたりするための契機となったと思われる。

## (2) 課題

課題としては、次のことが挙げられる。

### リアクションカードの利用の仕方

リアクションカードに書かせる課題が毎回同じになってしまうと、学習活動がマンネリ化し、生徒の意欲も半減しかねない。今回は、授業の展開に応じて「授業のまとめ」、「授業への動機付け」、「発展」といった様々な使い方をすることで、カードを書く事に対して生徒にマンネリ感を抱かせないように工夫したが、「どのタイミングで」、「どのようなねらいのもとで」、「何を書かせるのか」という点については、その効果も含めて十分に考えなければならない。

なお、リアクションカードは、生徒の記述を見て、次の時間の指導の改善に生かすことができることから、指導と評価の一体化の具体策として手軽に利用することができる。

## 使用教科書

・『改訂版高等学校国語総合』第一学習社

# それぞれの歌の魅力は？

○ A

20歳の女性の軽やかな  
青春のスタートをきれいに  
書いている短歌だと思う。  
女性の黒髪にくしけける  
所などは女性をすく意識  
させるためのものかなと思った。

○ A

柳にみかする黒髪という表現は下  
着くて美しいこと体伝わってきた。  
また、今を楽しんでいる感じが  
とてました。

○ C

この詩の最後の草木立と語  
を、していいというところに共  
感しました。たしかに記憶にある金  
魚の大臣は風景と空間、そして  
いて美しいと思いが

○ A

若い者の特有の輝のある豊かな  
黒髪が、強い生命かと思える青春を  
描いた言葉はとて私たちの世代  
に合っているように感じられる。

○ A

ルルルルルル —♡

20歳の恋に訴える  
純粋な想いが、  
スーッと伝わってくる  
詩でした。

ルルルルルル —♡

○ C

この時代はまた「信使」はあまり  
読れないけれど、自分個人に対  
する印象を望むと伝えたい所を  
見ると寺謝野氏は時代の履  
漸にとらわれず、自分の短歌を  
書く人だというのが分る。

○ B

若い女性に恋をしてしまい、自分の  
気持ちを伝えるのに生活を送って  
いる男性を描いたのではと思います。  
種々な性格をともちかなかな  
短歌が書かれます。

○ B

電車とかに乗ると、女の人に  
願の味なような人を見かける  
ので、あとこの歌もそんな人の  
ことをいってるんだと思って、  
なんとなく自分をイメージを  
つかみやすい歌だと思いました。  
そこが良かったのです。

○ C

私のことを羨望と言っているのが  
分ると思えました。自分を見つ  
められたいことは何となく分ると思  
うのでとても個性ある人なんだなと  
私は思いました。

# 作者のイメージは？

○

病氣などで、食べる物もなく  
す、がりせぬ細くした母を筆  
墨に、病気の軽工に泣いてしま  
い、あけなげなところから、作者は  
とて心で泣いて、人思いの人  
なんだなと思う。

○

・親や妻や友人のことにとても大切に思  
う、心優しい人  
・妻に花を買ってあげたり、女心を分か  
てる人  
・おれのお車中汽車に乗って大層な  
人

○

病がたて、思たよりの愛情を、短歌  
にのせている人だと思  
える。その短歌(或は本人の)と  
短歌のイメージは、1200人だと思  
える。

○

・濃い子、イロヤジ風  
真面目で頑固な職人肌

○

孤独な人。貧しい人。  
はじめの友人

○

・家族(母や妻)に思ひの  
ある人。  
・想像が豊か  
・日常的(生活的)な短歌を好  
む

○

家族や友達を大切に思  
う人、心優しいおもしろい  
人、涙もろい人など  
思う。

○

さびしさや、愛を背負った  
孤独な人  
↑  
もう母を背負って泣いてる時から

○

とても悲しい人生、苦勞して  
いる、貧しい人生を送って  
いる人

好きな作品の魅力を紹介しよう。1-1

北原白秋

○ 照月の声とかがねの戸

照る月日は、寂は空に思はるを表は  
あり、せんだん見えなくなる日に自分の  
さびしさを表現したものだと思ふ。

○ 照る月

寒さは定かだけれど、自分の  
眼は確実に見なくなつてしま  
う。その証拠に 照る月あかりは  
眼を潤さなければ見えないと  
いう作者の情景がわかって作者は  
眼がみえなくなつたら恐怖感、死の怖さ  
と思わせたところが魅力です。

○ 照る月の...

作者がだんたん目が見え  
なくなつていく様子が伝わ  
てきた。月が見えなくても目が見えな  
くたれという様子を思い  
うかべた。

斎藤茂吉

○ 沈黙

沈黙している自分は、百鬼の舞  
雨が降りそそいで、自分に負  
けかけていると思ふ。そして雨が  
なにも者がたどらぬところ

○ 沈黙の...

作者はうごかぬという気持ちが伝  
わてきた。  
黒い藪間に雨が降るのに重く暗  
くおどろく感じがした。

○ 沈黙の

自分は沈黙して静かに  
感じたが黒い藪間には  
雨が降りそそいで静か  
ではないと反差的な関係に  
二つがあつていい。

島本赤彦

○ みづあみの...

この歌を想像すると冬の曇り  
でんぱと雲、アキラギとこぼれ、三日月  
三日月がうつててまき草の感じが  
してとてもいい。

○ みづあみの...

この歌の魅力は、三日月の  
の淵の様子を表現して空と水  
を、うまい表現のしるべきな  
ななな。三日月の影波にうつる  
というところの表現が特徴的で  
感心だ。

○ みづあみの

水がどけた湖に三日月が  
うつるとこぼれを想像しやう  
曇りの太陽と星と満月  
とを三日月がうつっている  
のを短歌にしたと二に何か理由  
があらうのが魅力 (かな)

**事例 3****「水の東西」をもとに「私の比較文化論」を書く****1 育成を目指す言語能力**

話題や題材に応じて集めた情報を使って、論拠や筋道がはっきりした文章を書くという言語能力を育成する。新学習指導要領の「国語総合」の指導事項「B 書くこと」の「イ 論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること。」を指導の中心に取り上げ、「論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめている。」という評価規準を中心に評価する。また、「国語表現」の言語活動例の「ア 様々な考え方ができる事柄について、幅広い情報を基に自分の考えをまとめ、発表したり討論したりすること。」を参考にして設定した、「様々な考え方ができる事柄について話し合い、それを基にして自分の考えを文章にまとめる」という言語活動を通して、前述した能力を育成する。

この実践では、一般的には「読むこと」の指導において取り上げられる評論文「水の東西」（山崎正和）を、「書くこと」を指導の中心として位置づけ、その能力を育成する手段として「読む」という指導を展開した。生徒による作業時間の差が大きくなるために、指導時間がのびてしまいがちになる「書くこと」の指導を、できるだけスムーズに展開することを目指し、グループ学習を取り入れた。

**2 学習活動の概要**

(1) 単元名 「論拠や筋道がはっきりした文章を書く」

**(2) 単元の目標**

- ①「水の東西」を参考にして、二つの事項を対比して自分の見解を述べるために、適切な題材を選び、用語や論理の構成を工夫して書こうとする。 (関心・意欲・態度)
- ②「水の東西」を参考にして、二つの事項を対比して自分の見解を述べるために、適切な題材を選び、用語や論理の構成を工夫して書く。 (書く能力)
- ③二つの事項を対比しながら自己の見解を述べていくのに適した文章の構成を理解する。 (知識・理解)
- ④文章を書く際にふさわしい語句や表現について理解する。 (知識・理解)

**(3) 単元の評価規準**

関心・意欲・態度	書く能力	知識・理解
①「水の東西」を参考にして、二つの事項を対比して自分の見解を述べるために、適切な題材を選び、用語や論理の構成を工夫して書こうとしている。	①「水の東西」を参考にして、二つの事項を対比して自分の見解を述べるために、適切な題材を選び、用語や論理の構成を工夫して書いている。	①二つの事項を対比しながら自己の見解を述べていくのに適した文章の構成を理解している。 ②文章を書く際にふさわしい語句や表現について理解している。

(4) 指導と評価の計画(6時間)

※太字で囲まれた箇所、表題にある言語活動を行った。

※年間指導計画においては、この展開に要した6時間はすべて、「書くこと」の指導時間となる。

時間	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1 3	「水の東西」を読む 論の進め方(二つの事項を対比しながら自己の見解を述べる)に着目して、本文を読解する。		知識・理解① (観察)
4	「東の文化」、「西の文化」の具体例を考える (1)「水の東西」を参考にしながら「東の文化」、「西の文化」の具体例を挙げ、それらにおける違いをワークシート1(資料1)の【1】【2】にまとめる。 (2)ワークシート1の【1】【2】を基にして、自分が考えたことを、グループ内で発表する。 (3)グループ内で話し合い、「東の文化」、「西の文化」の具体例として最もふさわしいものを選ぶ。また、その違いをワークシート1の【3】にまとめる。 (4)グループごとに話し合いの結果を発表する。他グループの意見は、ワークシート2(資料2)にメモする。 (5)もう一度グループ内で話し合い、ワークシート1の【3】の内容を見直す。	○身近な生活の中からもなるべく多くの具体例を考えさせる。 ○5～6名で1グループとし、司会、記録、発表といった分担を決めさせる。 ○グループの中の話し合いにより、自分の考えを広げたり深めたりさせる。 ○他のグループの発表を聞く際には、新たな気付きや疑問点がないかどうか留意させる。	関心・意欲・態度① (ワークシート1、ワークシート2)への記述の確認)
5	「私の比較文化論」を400字程度で書く (1)グループごとに段落構成を考え、ワークシート3(資料3)にまとめる。 (2)グループで考えた段落構成を基にして、各自で400字程度の文章にまとめる。	○適切な段落構成となるように指導する。 ○「自分の考え」と「そう考えた理由(論拠)」は必ず入れるよう指導する。 ○「水の東西」の構成を参考にさせる。 ○構成をまとめることができないグループに対しては、ワークシート4(資料4)を渡し、指導する。 ○資料5「よりよい文章を書くために」を使い、書く際の留意点を意識させる。	関心・意欲・態度① (ワークシート3)への記述の確認)  書く能力① (作品の確認)
6	グループ内で相互評価を行う (1)互いの文章をグループ内で読み合い、相互評価を行う。 (2)グループ内で話し合い、一番よいと思う作品を選ぶ。	○資料5「よりよい文章を書くために」で確認した事項を踏まえて相互評価を行うよう、指導する。 ○全員の作品を回収する。その際、グループで「一番よい」とされた作品は、付箋を貼った状態で提出させる。	知識・理解①② (作品の確認)

### 3 評価の例

生徒のほとんどが、グループ活動の中で考えた題材や構成に基づいて、「私の比較文化論」を400字程度でまとめることができた。**資料6**の生徒作品は、その中で十分評価できるとした例である。生徒A、生徒Bのどちらの作品も、筋道がはっきりとした文章になっていることに加え、その文章の構成や語句の表現（特に、生徒Aの作品中にある「静止する布と流れる布」という箇所）からは、「水の東西」を参考にして、二つの事項を対比しながら自分の見解を述べていくための工夫を凝らした痕跡を見ることができる。

「書くこと」においては、文章の構成を考える段階で、なかなか構成をまとめられないために、作業が大幅に遅れてしまう生徒がいる。しかし今回は、具体例を選択して文章の構成を考えるとこまでを、グループで話し合いながら共同ですすめさせたことや、必要に応じて「水の東西」の文章を参考にさせたことで、実際に文章を書く場面では、どの生徒も前向きに取り組むことができた。一部には、原稿用紙を前にして、自分の考えをどのように言葉にしたらよいかで悩んだ生徒もいたが、教師が、**ワークシート4** (**資料4**) や「水の東西」を見せながら個別に指導することにより、自分の考えを400字程度でまとめることができた。

### 4 成果と課題

#### (1) 成果

本事例の成果として、次のようなことが挙げられる。

##### ア グループ学習を通して、「書くこと」の指導をスムーズに展開することができたこと

生徒はグループ学習を通して、話題や題材、文章の構成を共有した。その過程で、自分たちの実感を伴った話題や題材を選択したり、構成における論理の矛盾に気づいたりしたことで、適切な段落構成に基づいて、「私の比較文化論」を400字程度でまとめることが可能になったと思われる。

##### イ 「水の東西」をモデルとすることで、「書くこと」における学習の見通しを与えられたこと

一般に、「書くこと」の指導においては多くの時間を費やすことになりがちである。だが、今回のように、これから書こうとする文章の完成形を先に示して、生徒に学習の見通しをもたせることで、「何もない状態から作品を作り上げるまでを指導する」ことに比べて展開がスムーズになることが期待できる。今回の場合、生徒にとっては「水の東西」を繰り返し読むことが、文章の構成を考えたり文章を書き進めていく際のヒントになった。「書くこと」の指導の初期の段階や、「書くこと」に対して不慣れな生徒が多いような状況においては、このような工夫は効果的なのではないかと考える。

#### (2) 課題

課題としては、次のようなことが挙げられる。

##### ア 年間指導計画の見直し

「書くこと」の指導において、生徒に作品を書きあげさせるためには、ある程度のまとまった指導時間が必要である。そのためには、年間指導計画を見直して、取り上げる教材や言語活動について検討し、計画的に配置する必要がある。

##### イ 補助教材の共有化

受け身の学習になりがちな生徒を、主体的に学習活動に取り組ませるためには、生徒の状態に合わせてワークシート等を配布することで、適切に支援することが必要になる場合がある。また一方で、ワークシートには、それを用いることでスムーズに授業を展開できるという良さがある反面、場合によっては生徒の思考の幅を狭めてしまうこともある。

このため、ワークシートは、生徒の反応を確認しながら、生徒に合ったものを随時開発することが大切である。また、開発したワークシートは、教科内で共有することが望ましいと考える。

さらに、今後は「書くこと」に関して指導する際の資料を、国語科が他教科に提供する方向も視野に入れていく必要があるものとする。

#### 使用教科書

- ・『改訂版高等学校国語総合』第一 学習社

#### 参考文献

- ・田中孝一編 『新しい高校国語 指導の論理と実践 第二巻 書くことの指導』 明治書院

「水の東西」作業プリント 1

(組) (番名前)

① 例 例  
 ② 例 例  
 ③ 例 例  
 ④ 例 例  
 ⑤ 例 例

〔1〕 例にならって、東の文化・西の文化として書きわしむ具体例をいくつかあげてみよう。

〔2〕 例にならって、例にならってその違いを簡潔書き添えてみよう。

〔3〕 グループ内で話し合い、また、その違いを話しあってみよう。

「東の文化」  
 例 噴き上げる水  
 ① 流れる水  
 ②  
 ③  
 ④  
 ⑤

「西の文化」  
 例 噴水  
 ①  
 ②  
 ③  
 ④  
 ⑤

「東の文化」  
 ①  
 ②  
 ③  
 ④  
 ⑤

「西の文化」  
 ①  
 ②  
 ③  
 ④  
 ⑤

ワークシート1 記入例

「水の東西」作業プリント 1

(組) (番名前)

① 例 例  
 ② 例 例  
 ③ 例 例  
 ④ 例 例  
 ⑤ 例 例

〔1〕 例にならって、東の文化・西の文化として書きわしむ具体例をいくつかあげてみよう。

〔2〕 例にならって、例にならってその違いを簡潔書き添えてみよう。

〔3〕 グループ内で話し合い、また、その違いを話しあってみよう。

「東の文化」  
 例 噴き上げる水  
 ① 床にしゅう水  
 ② 食べ物をつかむ  
 ③ 動きにくい、水がすすらない  
 ④ 木でつくる  
 ⑤

「西の文化」  
 例 噴水  
 ① 床にしゅう水  
 ② 食べ物をつかむ  
 ③ 動きやすい、水がすすり、水が流れる  
 ④ 石でつくる  
 ⑤

「東の文化」  
 ① 植物からの材料(お米、お茶、お豆腐)  
 ② 仏教(お釈迦さま)  
 ③ 和服  
 ④ 木造建築  
 ⑤

「西の文化」  
 ① 動物からの材料(お肉、お魚、おたまご)  
 ② キリスト教  
 ③ 洋服  
 ④ 石造建築  
 ⑤



「水の東西」作業プリント 2

( ) (組) ( ) (番 名前) ( )

※目録例  
 「4」他のグループの意見もメモしておこう。

※目録例  
 「東の文化」

① 例 流れる水 ※その通り

②

③

④

⑤

⑥

---

「西の文化」

① 例 噴き上げる水

②

③

④

⑤

⑥

ワークシート 2 記入例

「水の東西」作業プリント 2

( ) (組) ( ) (番 名前) ( )

※目録例  
 「4」他のグループの意見もメモしておこう。

※目録例  
 「東の文化」

① 和菓子

② ふくろ

③ 和服

④ たてかみ

⑤ 着物

⑥ はし

⑦ 木造の家

例 流れる水 ※その通り

① 植物性  
 例 流れる水

② 木造の家

③ 動きにくい、形が規則的  
 おちついてくる。

④ くつぎ、お茶

⑤ 木でつくられている

---

「西の文化」

① 洋菓子

② ミニマ

③ 洋服

④ フロアリング

⑤ デレス

⑥ スパイン、ファブリック、ナイフ

⑦ 石造の家

例 噴き上げる水

① 動物性  
 ポリエチレン

② そのまま  
 木に固く

③ 動きやすい、形が不規則  
 華やか

④ くつぎ、お茶

⑤ 石でつくられている

「水の東西」作業プリント

( ) (組) ( ) (番名前) ( )

〔5〕 文章の構成を考えてみよう。

〈第一段落〉

〈第二段落〉

〈第三段落〉

ワークシート 3 記入例

「水の東西」作業プリント

( ) (組) ( ) (番名前) ( )

〔5〕 文章の構成を考えてみよう。

〈第一段落〉

日本と欧米の葉子の違い

- 日本の和菓子に植物性の材料が多い  
見た目が味が簡素
- 欧米の洋菓子に動物性の材料が多い  
ホイクリームが派手

〈第二段落〉

日本と欧米の文化の違い

- 日本は「いただきます」で地味なものが多い  
和菓子も古くは茶の湯の文化から
- 欧米は「カスタードクリーム」で華やかなものが多い  
和菓子も古くは茶の湯の文化から

〈第三段落〉

和菓子と洋菓子では見た目が茶の湯の文化から



よりよい文章を書くために

文章表現をよくするためには、次のことが大切です。

- 1 言いたいことがはっきりと書かれているか。
- 2 言いたいことが順序よく書かれているか。
- 3 一つ一つの段落がきちんと分けられているか。
- 4 一つ一つの文がわかりやすく書かれているか。

・主語と述語 修飾語と被修飾語がきちんと対応していること  
・文は長すぎないようにすること

- 5 適切な言葉を選んでいるか。

- 6 正しく書いているか。

・漢字 仮名遣いに誤りがないこと  
・読点の打ち方が適切であること

※ 自分の書いた文章を確認してみよう。

\* 田中孝一編「新しからぬ新編国語 指導の語理と実践第二巻 書くこと」の103～104ページを参考に作成した。

## (生徒Aの作品) 「服の東西」

東の文化を代表する具体例として和服を、西の文化を代表する具体例として洋服を考えた。まず、それぞれの特徴を考えることにする。

和服の特徴として、動きにくいことや柄で季節感を表せること等がある。和服は既に型が決まっていることが多く、その型によって季節を表すのは難しい。そこで季節に応じた柄を使い、四季を楽しむのだ。これは和服の醍醐味と言えるのではないか。

洋服の特徴は、動きやすいことや柄で季節感が表せないこと等がある。洋服は和服よりも型の種類が多くあり、動きやすいものも多々ある。また型によって、夏を涼しく、また冬を暖かく過ごすことができるために、柄を使わなくても季節感を表すことができる。

静止する布と流れる布。

和服と洋服の特徴は、この言葉で表せる。和服は布地を多く使っているため肌の露出が多くない。このことから、和服を着ると、自然と身が引き締まり、動きが小さくなる場合も多い。動きが小さいと布が大きく揺れたりせず、ドレープもできない。このことから、和服は静止する布と言える。一方、洋服は布地に動きがあることにより、ドレープができることもある。ドレープの流れるようなラインから、動きやすさや軽やかさが感じられる。このことから、洋服は流れる布と言える。

このように考えると、和服にも洋服にもそれぞれ良い点があり、どちらを着用してもその人の個性を表現することができる。現在、日本では和服を着用することが少なくなった。動きにくいことで敬遠されがちな和服だが、日本人特有の季節感を楽しむという点で見直してみたい。

## (生徒Bの作品) 「菓子の東西」

菓子は人々の娯楽の一つであるが、日本と欧米を比べてみると大きな違いがある。その違いについて考えてみたい。

まず日本の和菓子である。その特徴として、植物性の材料が多いことや、見た目や味が簡素であるということがあげられる。それに対し欧米の洋菓子は、特徴として動物性の材料も多く用いられることや、ボリュームもあり派手であることがあげられる。

その違いの原因について考えてみたい。日本の文化は、シンプルで一見すると地味なものが多い。同様に菓子も甘さ控えめで小さなものを好んだと考えられる。それに対し欧米の文化はカラフルで華やかなものが多い。やはり菓子でも味の濃いものや甘さの強い、サイズも大きいものを求め好んだのではないだろうか。また、宗教の違いによる食文化の違いも、菓자에影響を及ぼしている可能性も考えられる。

このように考えてみると、和菓子と洋菓子は見た目や味に多くの違いがある。しかし、どちらにしる人々に喜びや安らぎを与えるものであることに変わりないだろう。

### 3 言語活動を充実させるために

#### (1) 指導の改善の方向 ―言語活動を取り入れるという視点から―

言語活動とは文字通り「言語による活動」であり、それが指導のねらいを達成するための手段として授業の場にもち込まれたときに、それは学習活動となる。したがって、それが指導のねらいを達成するための手段であるならば、「隣の生徒と3分間話し合う」ことも言語活動（学習活動）となりうる。しかし教師は、「言語活動を取り入れた授業」と聞くと、「授業の中に言語活動という新しいことを取り入れなければならない」といった思いに代表されるような、漠然とした抵抗感をもちがちな現状があるのではないか。

例えば、「読むこと」の学習において、読む活動だけで、読む能力を十分に身につけさせることができるかといえば、それは否である。読む能力を十分に身に付けさせるためには、読むだけでなく、話したり、聞いたり、話し合ったり、書いたりする言語活動を通して指導を行うことが効果的である。これは教師は体験的に知っていることであり、日々の授業で実践していることでもあろう。つまり、前述の「漠然とした抵抗感」を払拭する近道は、まず、自身が既に授業に取り入れていた「生徒による言語活動」について、それが指導のねらいを達成するためのものであるかどうかという観点から振り返ることである。その中で、指導のねらいを達成するための言語活動であったものは生かし、指導のねらいが曖昧で、単なる思いつきだった言語活動は除外する。もし、生徒には授業での説明を聞かせているばかりで、生徒自身に言語活動をほとんどさせていないのであったなら、授業に言語活動の場面を設定する。このような視点から自身の授業を振り返ることは、各自の授業の改善につながる。

本調査研究においては、「授業の中で気軽にできる言語活動」というコンセプトのもと、「短時間でできる言語活動」という観点から実践を考えた。言語活動を短時間でを行うために、各事例において以下のような工夫をした。

**事例1**では教材の配列を工夫した。具体的には、取り立て指導で文法（助動詞）を学習した時間の直後に『伊勢物語』の「芥川」を配列し、前単元で学習した文法（助動詞）の知識を用いて行う言語活動を設定した。単元を前後に並べたことで、生徒の言語活動がスムーズに行われるようにした。

**事例2**では「短時間で展開・完結する言語活動」を考えた。具体的には、授業終了間際の10分程度を利用して、リアクションカードを書くというものである。このように短時間でを行う言語活動としては、この他にも、「5分間でノートに書く」、「席の前後の4人でグループになって10分間話し合う」等が考えられる。

**事例3**では学習の過程を工夫した。具体的には、生徒に作品を書かせる際に、これから書く文章の完成形のモデルとして「水の東西」を生徒に示すことで、学習の見通しをもたせるようにした。さらには、書く作業において生徒がつまずきがちな場面を、グループ学習で進めていくことで、生徒同士の学び合いによって円滑に学習を進めていくことができるようにした。

なお、**事例3**は、一般的には「読むこと」の指導において取り上げられる評論文「水の東西」を、「書くこと」を指導の中心として位置づけ、その能力を育成する手段として「読む」という指導を展開したものである。論の進め方に着目しながら「水の東西」を3時間で読解し、続く3時間で、生徒が「私の比較文化論」を書きあげるまでを指導した。そのため、単元全体としては6時間を要したが、年間指導計画においては、この6時間はすべて「書くこと」の指導時間として数えることになる。

本調査研究における言語活動は、「短時間でできる言語活動」という観点を重視したものであるが、どの事例からも、主体的に授業に参加しようとする生徒の姿を見ることができた。授業の中で、指導のねらいを達成する手段として適切な言語活動を取り入れていくことは、言語活動に費やす時間の長短にかかわらず、授業の活性化と生徒の学習意欲の喚起につながることを期待できる。

また、本研究の各事例の成果や課題から、言語活動を取り入れた授業改善の方向としては、次のような指導が有効であったことがわかった。生徒の実態に合わせて、各事例をアレンジしたり、考え方を参考にしたりして御活用いただければ幸いである。

#### ア 生徒同士が言語活動を通して、学んだ知識を実感を伴って理解する

学んだ知識を自分のものにするには、その知識を活用することを通して、自らの実感を伴って深く理解することが大切である。**事例1**では、学習した文法事項の知識を基にして物語を想起することを通して、生徒は学んだ文法事項の知識を深く理解するとともに、古典を原文で学ぶ意義についても感じ取ることができた。生徒にこのような実感をもたせることは、学習に対する生徒の意欲を高めていくことにもつながる。生徒同士が言語活動を通して、学んだ知識を実感を伴って理解する場を、効果的に指導の中に取り入れたい。

#### イ 生徒同士が言語活動を通して他者の見方に触れ、自分の考えを広げたり深めたりする

自分の考えを広げたり深めたりするためには、他者の見方に触れて、それに共感したり、疑問に思ったり、新たな視点を得たりすることが大切である。**事例2**では、「リアクションカードのまとめプリント」を通して、各自の見方をクラス全体で共有していく場面が、生徒が作品に対する自分の考えを広げたり深めたりするための契機となっていたと思われる。生徒同士が言語活動を通して他者の見方に触れ、自分の考えを広げたり深めたりする場を、効果的に指導の中に取り入れたい。

#### ウ 生徒同士が言語活動を通して学び合うことで、課題を乗り越えたり能力を高め合ったりする

教師は教えるべきことは教えなければならない。しかし、情報を一方的に与えただけでは生徒の生きた力にならないこともある。生徒同士で教え合ったり説明し合ったりすると、「分からない」ことが「何となく分かる」ようになったり、「よく分かる」ようになったりして、理解が深まることもある。また、**事例3**のように、生徒が一人で取り組んだとしたら行き詰ったであろう課題を、学び合いを通して乗り越えられることもある。主体的な学習態度の育成のために、また「腑に落ちた」理解や、人に説明できるレベルでの理解をさせるためにも、生徒同士が言語活動を通して学び合うことで、課題を乗り越えたり能力を高め合ったりする場を、効果的に指導の中に取り入れたい。

#### エ 学習のねらいを具体的に示す

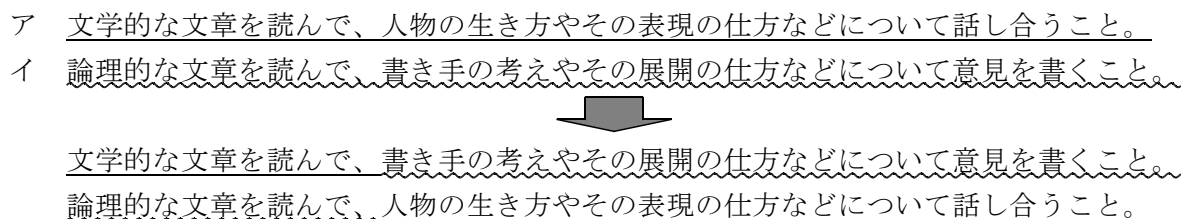
生徒にとって、国語は勉強の仕方がよく分からない教科の一つになっている。そのような現状を改善するためには、学び甲斐のある教材を提示するとともに、学習のねらいを具体的に示して、能力の向上の実感を伴う指導をすることが大切である。**事例3**においては、書くことにおける学習のねらいが明確であったため、生徒による相互評価の活動にもつなげることができた。また、学習のねらいの達成が不十分な生徒に対しても、適切に個別の指導をすることができた。

指導においては、学習のねらいを具体的に示すことを心がけたい。

## (2) 言語活動を取り入れる上での留意点

### ア 言語活動例についての考え方

学習指導要領に示された言語活動例は、あくまでも例である。したがって、それらのすべてを行わなければならないものではない。例えば「国語総合」の指導であっても、「古典B」の言語活動例を参考にして取り入れるであるとか、次のように、二つの言語活動例の部分を組み合わせて活動を再構成して実践することもできる。



### イ 言語活動を取り入れた授業を構想する過程

授業における言語活動とは、指導のねらいを達成するための手段の一つであり、それ自体が指導のねらいとなるものではない。「活動はあるが指導なし」という状況に陥らないためにも、言語活動を取り入れた授業を構想する際には、次のような過程を意識することが必要である。

- ①当該単元で身に付けさせたい言語能力を設定する（単元の目標となるもの。新学習指導要領の内容の（1）に示す指導事項から取り上げる。）。
- ②取り上げた言語能力を身に付けさせるのにふさわしい言語活動を設定する（具体的な学習活動となるもの。新学習指導要領の内容の（2）に例示している言語活動などから取り上げる。）。
- ③取り上げた言語活動にふさわしい教材を選定する。  
(鳴島甫・高木展郎編著 明治図書『高等学校 新学習指導要領の展開 国語科編』 p22より)

上記②の、「取り上げた言語能力を身に付けさせるのにふさわしい言語活動を設定する」際の前提は、「生徒がその言語活動を行えること」である。その言語活動が、生徒にとって初めて体験するものであるならば、それを手段として、目指す言語能力の十分な育成を図ることは難しいであろう。したがって、言語活動を取り入れた授業を構想する際には、小学校や中学校で生徒がどのような言語活動を行ってきているのかを把握することが大切になる。

また、言語活動を取り入れる際には、生徒のコミュニケーション能力が十分に育成されていないと、意図どおりに指導が展開しないこともある。常日頃の指導の中にペア学習を取り入れたり、ソーシャルスキルトレーニングや構成的グループエンカウンター<sup>①</sup>の指導法を援用したりして、学習集団として有効に機能する生徒の人間関係づくりに努めておくことも大切である。



## ウ 言語活動を取り入れる際の指導の過程・指導のポイント

言語活動を取り入れる際には、生徒がその言語活動にどれくらい慣れているのかを把握・予測したうえで臨むことが大切である。生徒の実態に応じては、言語活動を行う際に（またはその言語活動を行うまでの指導の過程において）、教師が適宜具体的な指導をすることが必要になる。

以下、「スピーチ」、「発表」、「報告」、「説明」、「討論」、「話し合い」、「批評」、「評価」、「聞くこと」や、「レポート」、「論文」、「報告書」の作成といった言語活動を授業で行う際に、必要になるとと思われる指導の過程・指導のポイントを示す。各校の実情に合わせて、アレンジしたり、考え方を参考にしたりして御活用いただければ幸いである。

### 【話すこと・聞くことに関する言語活動】

#### ○「スピーチ」・「発表」・「報告」・「説明」を取り入れる際の指導の過程・指導のポイント

	指導の過程	指導のポイント
1	・話題・資料を収集させる。	・書籍、新聞、インターネット、聞き取り、アンケート、観察結果等から、話す内容や目的に応じて収集させる。
2	・収集した話題・資料を検討させる。	・収集した話題・資料の妥当性を検討させる。 ・使用する話題・資料として適切なものを選ばせる。
3	・収集した話題・資料を基にして、話す内容（スピーチ・発表・報告・説明の内容）を考えさせる。  ・話す際に使用する資料を作らせる。	・生徒の実態や指導のねらいに応じては、マインドマップを書いたりブレインストーミングをしたりすること等を通して、話す内容を広げさせる。 ・生徒の発表スタイルを「原稿読み上げ」にするならば、原稿をつくらせる。生徒の実態や指導のねらいに応じては、原稿をつくらせる過程で、構成メモの指導が必要になることもある。また、生徒の発表スタイルを「メモを見ながら話す」にするならば、発表メモをつくらせる。（「構成メモ」・「発表メモ」の指導については、p32 「「レポート」・「論文」・「報告書」の作成を取り入れる際の指導の過程・指導のポイント」の「3」を参照） ・資料のまとめ方は、フリップ、パワーポイント等、適宜指示する。
4	・スピーチ・発表・報告・説明のリハーサルを行わせる。	・グループ等でのリハーサルを通して、自分が改善すべき点に気付かせ、改善させる。 ・生徒の実態や指導のねらいに応じては、声の大きさ、話すスピード、話すときの態度等の「話し方」についても、適宜指導する。
5	・スピーチさせる。発表させる。報告させる。説明させる。	・生徒の実態や指導のねらいに応じては、聞き方の指導もあわせて行う。

○「討論」・「話し合い」を取り入れる際の指導の過程・指導のポイント

	指導の過程	指導のポイント
1	・ 討論や話し合いを行うための適切な人数と編成で生徒を分ける。	・ 生徒各自の見方を広げさせるための討論・話し合いであるのか、生徒各自の考えを集約させるための討論・話し合いであるのか、そのねらいに応じて適切な人数と編成(例:「同じ考えをもつ者同士で4人グループにする」、「異なる考えをもつ者同士で4人グループにする」等)を考える。
2	・ 司会・記録等、討論や話し合いの中での役割を決めさせる。	
3	・ 討論させる。話し合わせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒の実態や指導のねらいに応じては、「相手の意見を否定せずに最後まで聞く」、「自分の考えだけでなく、そう考えた理由・論拠も説明する」等の、「話し合いのルール」も示す。</li> <li>・ 司会の生徒を中心に行わせる。</li> <li>・ 話し合いの記録は、必要に応じて記録係にとらせる。</li> <li>・ 「話し合いが広がったり深まったりするような仕掛け」(例:「話し合いの途中で別のグループと情報交換をさせる」)を適宜設ける。</li> </ul>
4	・ 討論や話し合いの結果をクラス全体で共有する。	・ 指導のねらいに応じて行う。

○「批評」・「評価(自己評価・相互評価)」することを取り入れる際の指導の過程・指導のポイント

	指導の過程	指導のポイント
1	・ 批評や評価を行う際の観点を生徒に把握させる。	・ どのような観点から批評・評価を行うのかを、事前の指導を通して、十分に生徒に把握させる。
2	・ 批評させる。評価(自己評価・相互評価)させる。	・ 自己評価・相互評価は学習活動であることに留意する。

○「聞くこと」における指導の過程・指導のポイント

	指導の過程	指導のポイント
1	・ 的確に聞き取らせる。	・ 生徒の実態や指導のねらいに応じては、聞き取りシート等を作成し、利用する。(参考 <a href="#">事例3</a> の <a href="#">資料2</a> )
2	・ 内容や表現の仕方を吟味しながら聞かせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聞いたことを基にして、自分のものの見方を広げさせたり、表現の参考にさせたりする。</li> <li>・ 聞いたことを基にして、生徒から質問、反論、助言、提案等をさせる。</li> </ul>
3	・ 自分の考えとの共通点や相違点を探りながら聞かせる。	

### 【書くことに関する言語活動】

書くことの指導の初期の段階や、生徒が書くことに不慣れな状況であるならば、「段落構成に配慮して」、「自分の見解を裏付ける資料・データを2種類使って」等のように、書く際に留意すべき点を生徒に具体的に示すことが大切である。こうすることで、指導のねらいが明確になると同時に、その文章を読む際の評価規準も明確になるため、生徒による相互評価などにも発展させやすくなる。漠然と「〇〇について書きなさい」と指示してしまうと、「何も指導しないまま書かせる」ことになりやすく、結果として、その文章を読む際の評価規準も定まらないため、教師は「その文章において気になることのすべて」を添削しなければならない状況に陥りやすい。

### ○「レポート」・「論文」・「報告書」の作成を取り入れる際の指導の過程・指導のポイント

	指導の過程	指導のポイント
1	・ 話題・資料を収集させる。	・ 書籍、新聞、インターネット、聞き取り、アンケート、観察結果等から、書く内容や目的に応じて話題・資料を収集させる。
2	・ 収集した話題・資料を検討させる。	・ 収集した話題・資料の妥当性を検討させる。 ・ 書く際の話題・資料として適切であるものを選ばせる。 ・ 生徒の実態や指導のねらいに応じては、各自が収集した話題について、生徒同士でその妥当性を検討させたり、教師による指導を行ったりする。(参考 <a href="#">事例3</a> )
3	・ 収集した話題・資料を基にして、書く内容を考えさせ、構想メモにまとめさせる。	・ 生徒の実態や指導のねらいに応じては、マインドマップを書いたりブレインストーミングをしたりすること等を通して、書く内容を広げさせる。 ・ 生徒の実態や指導のねらいに応じては、この段階で、生徒同士で相互評価をさせたり、教師による指導を行ったりする。(参考 <a href="#">事例3</a> )
4	・ 下書きをさせる。	
5	・ 下書の添削をさせる。(または、下書きの添削をする。)	・ 生徒の実態や指導のねらいに応じては、この段階で生徒同士で添削をさせたり、教師が添削したりする。
6	・ レポート・論文・報告書にまとめさせる。	
7	・ レポート・論文・報告書の発表会・批評会を行う。	・ 生徒の実態や指導のねらいに応じて適宜設ける。また、生徒の実態や指導のねらいに応じては、聞き方の指導もあわせて行う。

### (3) 各教科・科目等における言語活動の充実に資するという視点から

今回の学習指導要領改訂においては、各教科において言語活動を充実することが求められている。このことについて、新学習指導要領解説国語編では以下のように述べられている。

〈高等学校学習指導要領解説国語編 第3章—3—(5) 抜粋〉

知識及び技能を習得するのも、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現するのもすべて言語によって行われるものであり、これらの学習活動の基盤となるのは、言語に関する能力である。さらに、言語は論理的思考だけではなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあり、豊かな心をはぐくむ上でも、言語に関する能力を高めていくことが求められている。したがって、今回の改訂においては、言語に関する能力の育成を重視し、各教科・科目等において言語活動を充実することとしている。

このような活動の中心となるのは国語科である。各教科・科目等においては、国語科で育成した能力を基本に言語活動を充実していくことになる。そこで、国語科の指導においては各教科・科目等における言語活動の充実に資するという視点を常にもつ必要がある。特に、高等学校国語においては、課題探究的な内容をもつ指導事項や言語活動例で、そのことを強く意識することが大切である。国語科の指導と、各教科・科目等の指導とが適切に連携して行われてこそ、言語に関する能力を確実に育成することができる。そこで、国語の各科目の指導と評価の計画の中に、他の教科・科目等の指導との関連を明確に位置付ける必要がある。 (下線は稿者が付した。)

このように、国語科においては、国語に関する科目の中での言語活動を充実させることに加えて、各教科・科目等における言語活動の充実に資するという視点も併せもつことが期待されている。

では、各教科・科目等における言語活動の充実に資するという視点から、国語科として実際にどのようなことができるのか。そのためには、以下の視点が必要と思われる。

- ・各教科・科目等の中で、どのような言語活動が、年間のどの時期に行われるのかを把握する。
- ・国語科の指導において、どのような言語活動が、年間のどの時期に行われるのかを発信する。

上記のことを実現するための方法の一つとしては、年間指導計画に関する工夫がある。ここでは、年間指導計画を作成することを通して、指導事項の偏りを是正したり、教科・科目担当者間で指導に関する共通理解が得やすくなるような年間指導計画の枠組みを提案したい。このような年間指導計画を教科間で交換すれば、互いの教科の年間の指導の流れを把握できることから、校内における指導の連携も図りやすくなることが期待できる。

ここで提案する年間指導計画の枠組みには以下の二つの特徴がある。

- ①当該教科・科目の中での「指導のねらい」を、計画の軸とした作りになっている。
- ②当該教科・科目の中で行われる「言語活動」を明示する形になっている。

上記①「当該教科・科目の中での「指導のねらい」を計画の軸とした作りになっている」ことによって、生徒にどのような力をつけたいのかを、より明確にすることができる。従来の年間指導計画は「教材名」を軸にして、その横に「指導のねらい」をつけた形のものが多かった。このような書き方は、教材名が軸になっているために教科書との対応がわかりやすいという利点はあるが、その反面、教科書の教材配列に依拠した年間指導計画になりやすいために、生徒の実態と合わないことがあり、結果として形骸化してしまうこともあった。

年間指導計画は学校における教科教育計画の核であり、その中心になるのは「その教科で生徒にどのような力をつけさせるか」という「指導のねらい」である。そして、「指導のねらい」を実現するための手立てが「言語活動」であり、授業で使用する素材が「教材」である。年間指導計画を作るにあたって、その計画の軸を「指導のねらい」とすることで、授業者は指導のポイントをより明確に意識でき、また、教員間における指導に関する共通理解も、より図りやすくなる。また、このように「指導のねらい」を視覚化することで、指導事項の偏りにも気付きやすくなる。さらには、「指導のねらい」を軸とする年間指導計画であるならば、教科書の教材配列への依存は比較的低くできるために、教科書が変わった年度においても、年間指導計画の修正は教材名を入れ替える程度の調整ですむ。

前記②「当該教科・科目の中で行われる「言語活動」を明示する形になっている」ことによって、「指導事項を言語活動を通して指導する」ということを一層明確に意識することができる。このような年間指導計画を他教科と交換すれば、「言語活動」が明示されていることで、どのような言語活動をいつ行っているのかということ、互いに把握することができる。それによっては、例えば、レポート作成を国語科で11月に、地歴公民科で7月にそれぞれ計画していた場合に、生徒の実態からすると国語の授業で先にレポート作成を行う方がよいのであれば、国語科でレポート作成を行う時期を6月に設定しなおす、などという判断もあるかもしれない。このように、他教科でどの言語活動がいつ行われるのかということを見視野に入れて国語科の指導計画との関連を図ることは、他教科における教育活動に対して、国語科としての役割を果たすことにもつながる。

以下に、ここで提案する年間指導計画の枠組みと、その説明を示す。各校の実情に合わせて、この枠組みをアレンジしたり、考え方を参考にしたりして御活用いただければ幸いである。

【年間指導計画の枠組みの例】

●国語科（「国語総合」）年間指導計画									
月	時数	指導のねらい (学習目標)	学習指導要領における指導事項				取り入れる 言語活動	評価規準と評価の方法	教材等
			A	B	C	伝統的な …に関する 事項			
4	3	場に応じて効果的に話す。	イ			イ(イ)	興味をもっていることを発表する。 (スピーチ)	テーマの説明やエピソードについて、聞き手を意識してわかりやすく話す工夫をしている。 【スピーチ原稿の点検・発表の様子を観察】	スピーチ
	5	表現の特色に注意して読む。			ア	イ(イ)	表現の仕方について気付いたことをグループで話しあう。	表現の仕方について気付いたことを自分なりにとらえ、ノートにまとめている。 【ノートの記述の点検】	随想 ○○○
5	6	文章の内容を的確に読み取る。			イ	イ(イ)	要約を書く。	文章を400字で原稿用紙に要約している。 【原稿用紙の点検】	評論 ○○○
	⋮	⋮					⋮	⋮	⋮

## ○「時数」

指導に予定している時間数を記入する。

## ○「指導のねらい」(学習目標)

指導のねらいとして中心となるものを書く。いくつも羅列するのではなく、重点化し、絞りこんだものを記入する。

## ○「学習指導要領における指導事項」

「指導のねらい」の根拠となる、学習指導要領における指導事項との関連をここで示す。

例として示した左ページの枠組みは、新学習指導要領における「国語総合」を想定したものであるため、「学習指導要領における指導事項」の項目の下は、「国語総合」の3領域1事項を書き入れられるように、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」に付された「A」、「B」、「C」の符号と、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」とで分割する。「A」、「B」、「C」それぞれの項目の下には、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」における指導事項のうち、指導のねらいに関連する符号を、例のように入れる。「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の項目の下には、この事項が「指導のねらい」に入っている場合にのみ、関連する事項の符号「ア(ア)」～「ウ(ア)」を例のように入れる。

このように「指導のねらい」と「学習指導要領における指導事項」との関連を視覚化することで、両者の関連が明確になるだけでなく、「指導のねらい」の偏りの有無を確認し、必要に応じて是正することができる。

なお、例として示した年間指導計画は「国語総合」のものであるが、これがもし「古典A」であるならば、「学習指導要領における指導事項」の項目の下は、「古典A」の指導事項「ア」、「イ」、「ウ」、「エ」を項目名として分割する。

## ○「取り入れる言語活動」

「指導のねらい」を達成するための、主となる言語活動を記入する。

## ○「評価規準と評価の方法」

「指導のねらい」を見取るための、主となる評価規準を書く。ここに評価の方法も明示することで、より実地的な評価規準を考えることができる。

## ○「教材」

指導のねらいを達成するために素材とするもの(教材名等)を記入する。

## 【参考資料】 新学習指導要領における国語科改訂の要点

### 1 国語科の目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

高等学校国語では、今回の改訂においても言語の教育としての立場を重視し、社会人として生きるために必要とされる国語の能力の基礎を身に付けるという基本的な理念を継承している。したがって、教科の目標については、小学校及び中学校との系統性を重視するため、想像力を伸ばすことについての記述を新たに加えているほかは、これまでと同様である。

### 2 高等学校国語科の改善に関する具体的事項

○中学校までに培われた国語の能力を更に伸ばし、社会人として必要とされる国語の能力の基礎を身に付けることができるようにするとともに、生徒一人一人の能力・適性、興味・関心に応じた多様な学習が行われるよう、各科目の構成及び内容を次のように改善する。

(ア)「**国語総合**」は、現行の「国語総合」の内容を改善したものとする。実社会で活用できる国語の能力を身に付けるため、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの学習が総合的に行われるよう、内容を改善する。

その際、特に、文章や資料等を的確に理解し、論理的に考え、話したり書いたりする能力を育成することや、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度の育成を通して、感性や情緒をはぐくむことを重視する。

(イ)「**国語表現**」は、現行の「国語表現Ⅰ」及び「国語表現Ⅱ」の内容を再構成したものとする。

「国語総合」の学習を踏まえ、文章や資料等を的確に理解し、論理的に考え、適切に話したり書いたりする力など、実社会で活用することのできる表現の能力を確実に育成するとともに、進んで表現する意欲や現代の国語の向上を図る態度をはぐくむようにする。

(ウ)「**現代文A**」は、近代以降の文章を対象とし「**古典A**」と対をなす科目として新設する。「国語総合」の学習を踏まえ、生涯にわたって日常的に読書に親しむ態度をはぐくむ。関連して、言語生活の在り方、言語の役割、国語の特質等についても指導し、我が国の言語文化に対する理解ができるようにする。

(エ)「**現代文B**」は、現行の「現代文」の内容を改善したものとする。「国語総合」の学習を踏まえ、近代以降の様々な種類の文章や資料を教材として取り上げ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を通して、読む能力のみならず、読んだことをもとにして考え、判断・評価し、それをまとめて論理的に表現する能力を育成するとともに、文字・活字文化に対する理解が深まるようにする。

(オ)「**古典A**」は、現行の「古典講読」の内容を改善したものとする。「国語総合」の学習を踏まえ、古典の原文（近代以降の文語調の文章を含む）のみならず、古典についての解説文や小説、随筆なども教材として幅広く取り上げ、古典の世界に親しむ態度をはぐくむ。関連して、言語の役割、国語の成り立ちや特質についても指導し、我が国の言語文化に対する理解ができるようにする。

(カ)「**古典B**」は、現行の「**古典**」の内容を改善したものとする。「**国語総合**」の学習を踏まえ、**古典**の原文や、**古典**についての評論文などを教材として取り上げ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を通して、系統的に**古典**に接することができるようにし、**古典**に対する関心と知識を高め、**古典**を読む能力を育成する。

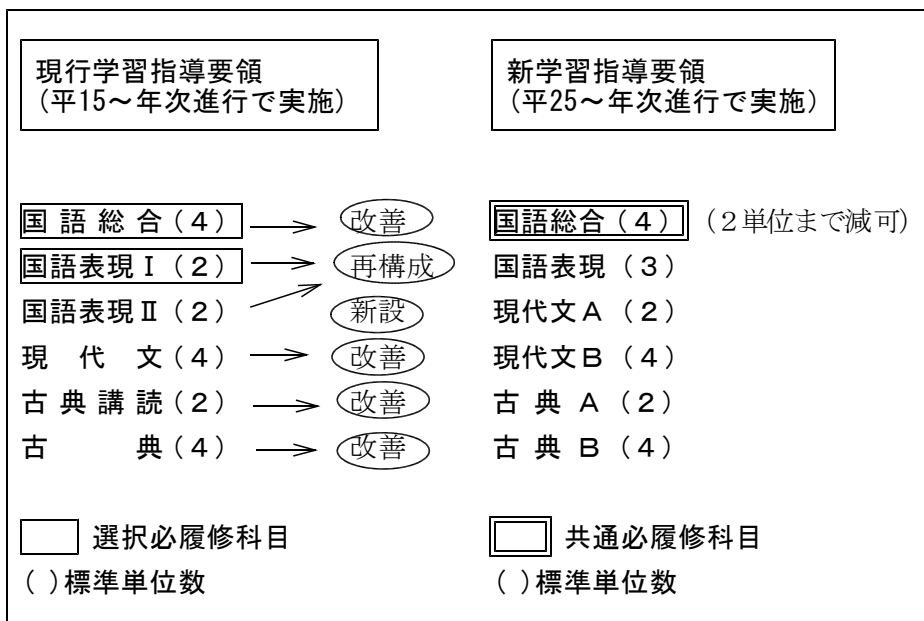
### 3 科目構成の改善

これまでの「**国語表現Ⅰ**」、「**国語表現Ⅱ**」、「**国語総合**」、「**現代文**」、「**古典**」及び「**古典講読**」の6科目から成る構成が、「**国語総合**」、「**国語表現**」、「**現代文A**」、「**現代文B**」、「**古典A**」及び「**古典B**」の6科目から成る構成となった。このうち、総合的な言語能力を育成する「**国語総合**」が共通必修科目となり、他の5科目は、「**国語総合**」の内容を、科目の性格、特色に応じて発展させた選択科目となった。

今回の改訂で共通必修科目を置くこととなったのは、答申において「学習の基盤であり、広い意味での言語を活用する能力とも言うべき力を高める**国語**、**数学**、**外国語**については、現在選択必修となっていて、義務教育の成果を踏まえ、共通必修科目を置く必要がある。」と提言されたことによる。この趣旨を踏まえ、「**国語総合**」が共通必修科目となった。これにより、高等学校**国語**において指導する内容の共通性を重視することとなった。

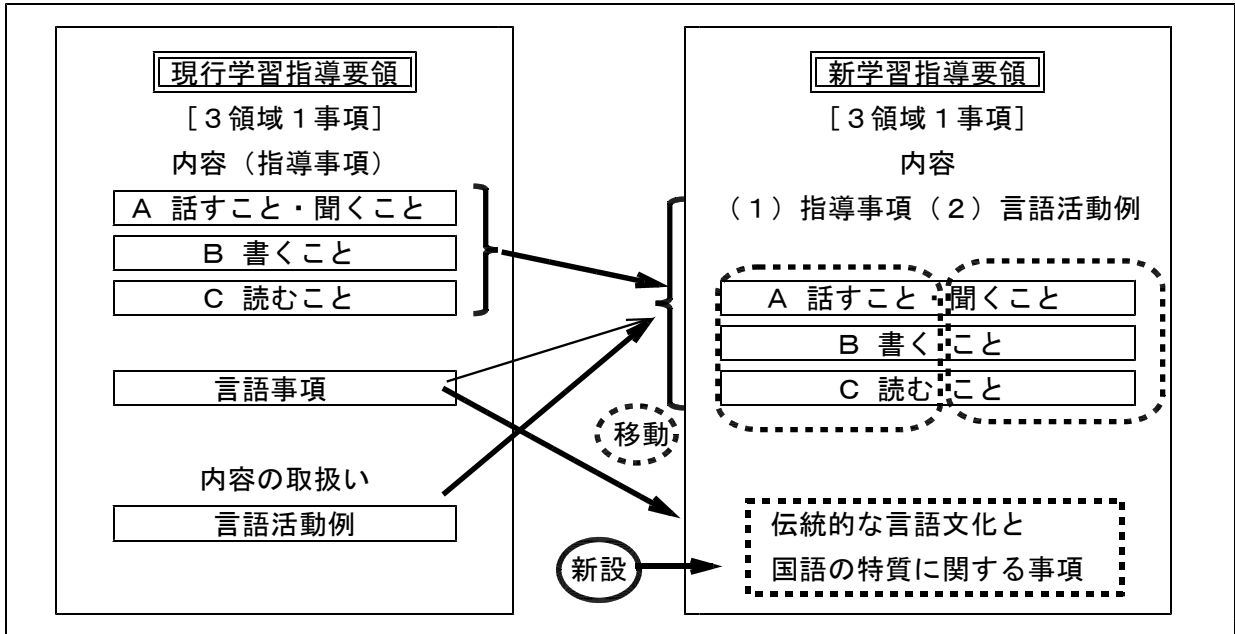
表現に関する科目が1科目となったのは、「**国語総合**」との関係を整理し再構成したためである。また、これまでも2科目で構成していた**古典**に関する科目に加え、**現代文**に関する科目も2科目としたのは、生徒の多様性に対応するとともに、言語文化についての指導を重視するためである。

科目構成の改善について図示すると、次のようになる。





#### 4 内容構成についての改善（「国語総合」）



#### 5 言語活動の位置づけについて

言語活動を通して指導事項について指導するという枠組みはこれまでと同様であるが、今回の改訂では、各科目及び領域の内容の（１）に指導事項を示すとともに、これまで内容の取扱いに示されていた言語活動例が内容の（２）に位置付けられ、再構成された。これは、内容の指導にあたって、（１）に示す指導事項を（２）に示す言語活動例を通して指導することを一層明確にするとともに、各教科・科目等における言語活動の充実に資するためである。

なお、内容の（２）に示された言語活動例は、中学校までも含めて既に指導されていることである。また、例として示されているので、これらのすべてを行わなければならないものではなく、それ以外の言語活動を取り上げることも考えられる。

#### 6 「国語総合」の領域等との関連からみた各選択科目の指導事項

国語総合	A 話すこと・聞くこと	B 書くこと	C 読むこと	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
国語表現	（話すこと・聞くこと）	（書くこと）		（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
現代文A			（読むこと）	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
現代文B	（話すこと・聞くこと）	（書くこと）	（読むこと）	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
古典A			（読むこと）	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
古典B			（読むこと）	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

（太線枠は、各選択科目において、より指導の中心となるものを示している。）

【参考資料】

高等学校国語科の学習指導要領に示された言語活動例の新旧対照表

\* 下線を付した部分が変更点

	現行の学習指導要領（平成15年～年次進行で実施）	国語総合	新学習指導要領（平成25年～年次進行で実施）
<p>国語総合</p>	<p><b>話すこと・聞くこと</b>                      (ア) 話題を選んで、スピーチや説明などを行うこと。                      (イ) 情報を収集し活用して、報告や発表などを行うこと。                      (ウ) 課題について調べたり考えたりしたことを基にして、話し合いや討論などを行うこと。</p> <p><b>書くこと</b>                      (ア) 題材を選んで考えをまとめ、書く順序を工夫して説明や意見などを書くこと。                      (イ) 相手や目的に応じて適切な語句を用い、手紙や通知などを書くこと。                      (ウ) 本を読んでその紹介を書いたり、課題について収集した情報を整理して記録や報告などを書いたりすること。</p> <p><b>読むこと</b>                      (ア) 文章に表れたものの見方や考え方などを読み取り、それらについて話し合うこと。                      (イ) 考えを広げるため、様々な古典や現代の文章を読み比べること。                      (ウ) 課題に応じて必要な情報を読み取り、まとめて発表すること。</p>	<p>国語総合</p>	<p><b>話すこと・聞くこと</b>                      ア 状況に応じた話題を選んでスピーチしたり、資料に基づいて説明したりすること。                      イ 調査したことなどをまとめて報告や発表をしたり、内容や表現の仕方を吟味しながらそれらを聞いたりすること。                      ウ 反論を想定して発言したり疑問点を質問したりしながら、課題に応じた話し合いや討論などを行うこと。</p> <p><b>書くこと</b>                      ア 情景や心情の描写を取り入れて、詩歌をつくりたり随筆などを書いたりすること。                      イ 出典を明示して文章や図表などを引用し、説明や意見などを書くこと。                      ウ 相手や目的に応じた語句を用い、手紙や通知などを書くこと。</p> <p><b>読むこと</b>                      ア 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること。                      イ 文字、音声、画像などのメディアによって表現された情報を、課題に応じて読み取り、取捨選択してまとめること。                      ウ 現代の社会生活で必要とされている実用的な文章を読んで内容を理解し、自分の考えをもって話し合うこと。                      エ 様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。</p>
<p>国語表現 I II</p>	<p>ア 自分の考えを明確にして、スピーチ、発表、討論などを行うこと。                      イ 観察したことや調査したことを記録したり、まとめて報告したりすること。                      ウ 相手や目的に応じて、案内、紹介、連絡などの話をしたり文章を書いたりすること。                      エ 身近にある様々な表現を集めてその効果などについて考えたり、生徒の表現活動について自己評価や相互評価を行ったりすること。</p>	<p>国語表現</p>	<p>ア 様々な考え方ができる事柄について、幅広い情報を基に自分の考えをまとめ、発表したり討論したりすること。                      イ 詩歌をつくりたり小説などを書いたり、鑑賞したことをまとめたること。                      ウ 関心をもった事柄について調査したことを整理して、解説や論文などにまとめること。                      エ 相手や目的に応じて、紹介、連絡、依頼などのための話をしたり文章を書いたりすること。                      オ 話題や題材などについて調べてまとめたことや考えたことを伝えるための資料を、図表や画像なども用いて編集すること。</p>

	現行学習指導要領（平成15年～年次進行で実施）	新学習指導要領（平成25年～年次進行で実施）
現代文	<p>ア 論理的な文章を読んで、書き手の考えやその展開の仕方などについて意見を書くこと。</p> <p>イ 文学的な文章を読んで、人物の生き方やその表現の仕方などについて話し合うこと。</p> <p>ウ 文章の理解を深め、興味・関心を広げるために、関連する文章を読んだり創作的な活動を行ったりすること。</p> <p>エ 自分で設定した課題を探索し、その成果を発表したり報告書などにまとめたりすること。</p>	<p>現代文 A</p> <p>ア 文章の調子などを味わいながら音読や朗読をしたり、印象に残った内容や場面について文章中の表現を根拠にして説明したりすること。</p> <p>イ 外国の文化との関係なども視野に入れて、文章の内容や表現の特色を調べ、発表したり論文にまとめたりすること。</p> <p>ウ 図書館を利用して同じ作者や同じテーマの文章を読み比べ、それについて話し合ったり批評したりすること。</p>
現代文	<p>ア 論理的な文章を読んで、書き手の考えやその展開の仕方などについて話し合うこと。</p> <p>イ 文学的な文章を読んで、書き手の考えやその展開の仕方などについて意見を書くこと。</p> <p>ウ 伝えたい情報を表現するためのメディアとしての文字、音声、画像などの特色をとらえて、目的に応じた表現の仕方を考えたり創作的な活動を行ったりすること。</p> <p>エ 文章を読んで関心をもった事柄などについて課題を設定し、様々な資料を調べ、その成果をまとめて発表したり報告書や論文集などに編集したりすること。</p>	<p>現代文 B</p> <p>ア 文学的な文章を読んで、人物の生き方やその表現の仕方などについて話し合うこと。</p> <p>イ 論理的な文章を読んで、書き手の考えやその展開の仕方などについて意見を書くこと。</p> <p>ウ 伝えたい情報を表現するためのメディアとしての文字、音声、画像などの特色をとらえて、目的に応じた表現の仕方を考えたり創作的な活動を行ったりすること。</p> <p>エ 文章を読んで関心をもった事柄などについて課題を設定し、様々な資料を調べ、その成果をまとめて発表したり報告書や論文集などに編集したりすること。</p>
古典講読	<p>ア 古文や漢文の調子などを味わいながら、音読、朗読をすること。</p> <p>イ 古典に表れた思想や感情などについて、感じたことや考えたことを文章にまとめたり発表したりすること。</p> <p>ウ 古典を読んで、関連する文章や作品を調べたり読み比べたりすること。</p>	<p>古典 A</p> <p>ア 古文や漢文の調子などを味わいながら音読、朗読、暗唱をすること。</p> <p>イ 日常の言語生活の中から我が国の伝統と文化に関連する表現を集め、その意味や特色、由来などについて調べたことを報告すること。</p> <p>ウ 図書館を利用して古典などを読み比べ、そこに描かれた人物、情景、心情などについて、感じたことや考えたことを文章にまとめたり話し合ったりすること。</p>
古典	<p>ア 古文や漢文の調子などを味わいながら、音読、朗読、暗唱をすること。</p> <p>イ 国語の変遷などについて関心を深めるため、辞書などを用いて古典の言葉と現代の言葉とを比較対照すること。</p> <p>ウ 古典に表れた思想や感情の特徴、表現上の特色などについて話し合うこと。</p> <p>エ 古典を読んで関心をもったことなどについて調べ、文章にまとめること。</p>	<p>古典 B</p> <p>ア 辞書などを用いて古典の言葉と現代の言葉とを比較し、その変遷などについて分かったことを報告すること。</p> <p>イ 同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること。</p> <p>ウ 古典に表れた人間の生き方や考え方などについて、文章中の表現を根拠にして話し合うこと。</p> <p>エ 古典を読んで関心をもった事柄などについて課題を設定し、様々な資料を調べ、その成果を発表したり文章にまとめたりすること。</p>

高等学校における教科指導の充実  
国 語 科  
新学習指導要領への対応－言語活動の充実（2）－

発 行 平成23年3月  
栃木県総合教育センター 研究調査部  
〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070  
TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303  
URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>